松江東照宮（とうしょうぐう）と圓流寺（えんりゅうじ）伝来の石造物について

－松江神社、圓流寺、鰐淵寺等に所在する石造物－

岡崎雄二郎・西尾克己・稲田　信・椿　真治・
木下　誠・松尾充晶・高屋茂男

1．はじめに

松江藩の時代、現在の松江市立女子高等学校の所在地（松江市西尾町）に、「東照宮」とその別当寺として建てられた「圓流寺」があった。

東照宮は寛永５年（1628）堀尾忠晴が徳川家康を祭神として建立したものである。また、圓流寺（山号照光山、天台宗）は、鰐淵寺密厳院の僧豪教を招いて開山としている[(1)]。東照宮も圓流寺も、松江藩によって支えられる格式の高い社寺であった。

その後、明治10年（1877）に、楽山（西川津町）に松平直政を祀る楽山神社が建立され、東照宮は明治31年（1898）に楽山神社に合祀された。さらに、楽山神社は翌明治32年（1899）10月に松江城山内へ移され、松江神社と改称した[(2)]。松江神社には、これらの経緯により、建造物、宝物、石造物等に東照宮から移されたものが伝えられている。

一方、圓流寺は荘厳な本堂を持つ寺院であったが、昭和16年（1941）ごろには「僅かに本堂の所在に旧来庫裏の古材を用いて小規模の庫裏を再建し、御霊殿、通殿、拝殿、四ツ足門、唐門、鐘楼等は存するものの、唐門の外は桧皮葺きを瓦葺に改めた。」という状況であった[(3)]。その後、残った建物等も徐々に失われ、昭和40年（1965）の松江市立女子高等学校の建設で全ての建物は解体され、圓流寺は小堂宇となり、中に収められた歴代将軍の位牌、什器、経典等を除いて、他所に散逸していった。

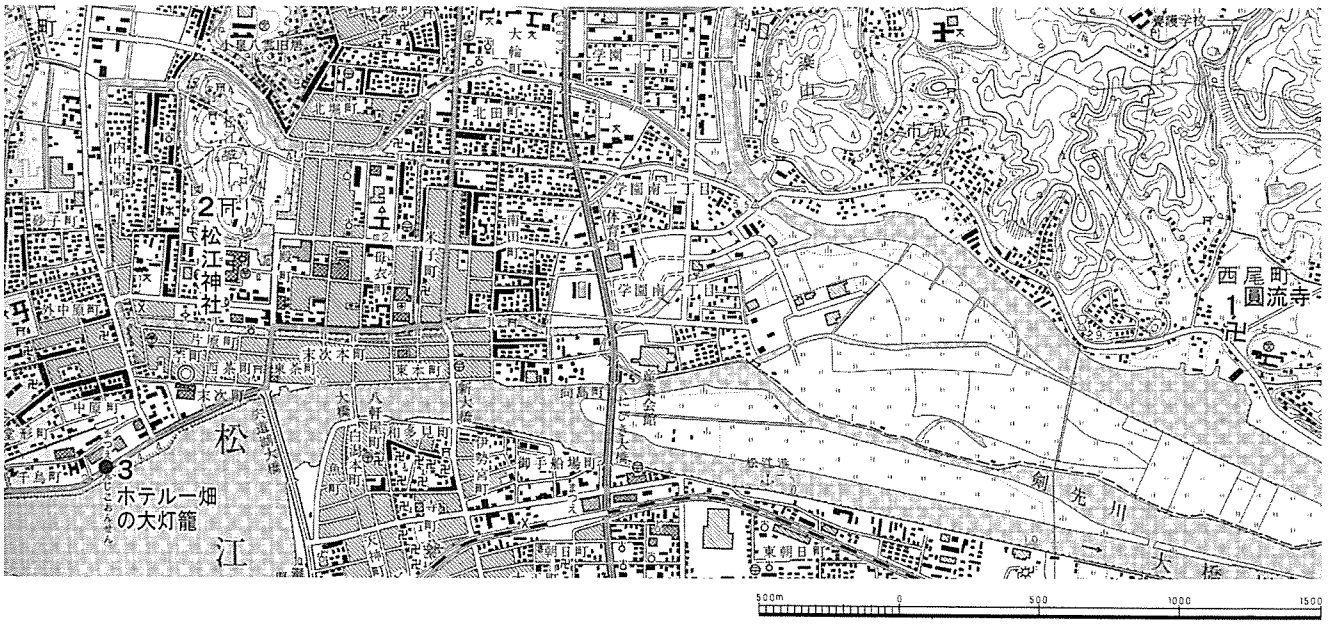


図１　東照宮、圓流寺伝来の石造物位置図（１．圓流寺　２．松江神社　３．ホテルー畑の大灯籠）

松江藩によって維持され、高い格式を持った東照宮、圓流寺の記録、記憶が失われていく中で、可能な範囲で現時点での記録をとどめていくことは重要と考える。東照宮、圓流寺の寺格、社格を考えるとき、多くの関連石造物が存在したと思われるが、本稿では、松江神社所在の東照宮伝来の石造物、圓流寺伝来とされるホテル一畑（千鳥町）の大灯籠、現圓流寺（西尾町）の板碑、また、鰐淵寺に残る圓流寺住職の石塔を紹介する。

注１　上野富太郎、野津静一郎『松江市誌』1941

注２　注１に同じ

注３　注１に同じ

（参考）黒沢長尚『雲陽誌』1717（享保２）、朝酌小学校開校八十周年記念事業委員会『あさくみ郷土誌考』1956、朝酌郷土誌編集委員会『朝酌郷土誌』2001

２．松江神社の石造物群

松江神社境内には参道沿いを中心に、鳥居、灯籠、狛犬（唐獅子）、手水鉢等が配されている。（表１）昭和16年頃の圓流寺について、「山上の鳥居は慶安二年四月十七日松平直政の寄進にて、二ケの石燈籠は元治二年四月十七日松平定安の建設にかかっている」(1)とあり、その後、記事の鳥居と灯籠は松江神社に移され、現存する。また、手水舎も東照宮から移されたと伝えられ、手水鉢も合わせて移されたと考えられる。

(1) 松平直政寄進鳥居

松平直政寄進の鳥居は旧東照宮跡（松江市西尾町）に建っていたもので、昭和40年（1965）刊行の書籍には「旧東照宮跡上の鳥居」として移転前の写真とともに紹介されている(1)。松江女子高の校舎建設に伴い、昭和42年（1967）に松江神社に移され、現在、神社正面の参道入口に据えられている。鳥居の脇に「莘（華）表再建　昭和四十二年十二月」と刻まれた小さい石碑がある。

花崗岩製の明神鳥居で、２本の柱の上に２本の石材を組み合わせた笠木、島木（１石で表現）を渡し、その下に貫を入れ、貫と島木の間に額束を建てている。笠木上面は屋根形に加工し、中央から両端に向けて緩やかに反り上がり、笠木、島木の両端は内側に向かって斜めに切り落としている。柱は内向きに傾き、両柱下部は根巻石で固定している。

柱下部から笠木上端部までの高さは5.02ｍ（中央で4.85ｍ）、笠木の横幅（先端部間）は6.85ｍ、島木の横幅（上端部間）は6.5ｍ。額束は高さ47㎝、幅40㎝、貫は縦幅43㎝、横幅6.45ｍ。柱は下部で直径52㎝、上部で直径43㎝、柱間（芯芯）は下部で3.96ｍ、上部で3.5ｍ。根巻石は直径1.1ｍである。柱は左右とも２つの円柱を継いでおり、左柱は高さ2.99ｍ、右柱は高さ3.6ｍで継いでいる。

左柱には「慶安二 己丑暦四月十七日」「出雲侍従源直政朝臣」、右柱には「奉寄進」「石莘（華）表一基」「照高山」「東照宮大権現寶前」の銘文が刻まれており、この鳥居が慶安２年（1649）４月17日に松平直政によって寄進されたことが分かる。石材を見ると、全て花崗岩ではあるが、笠木、島木、正面左柱（下部：慶安２年の銘文が刻まれた石柱）、右柱（上部）はやや赤味がかっており、他の石材とは異なる。

注１　上野富太郎、野津静一郎『松江市誌』1941

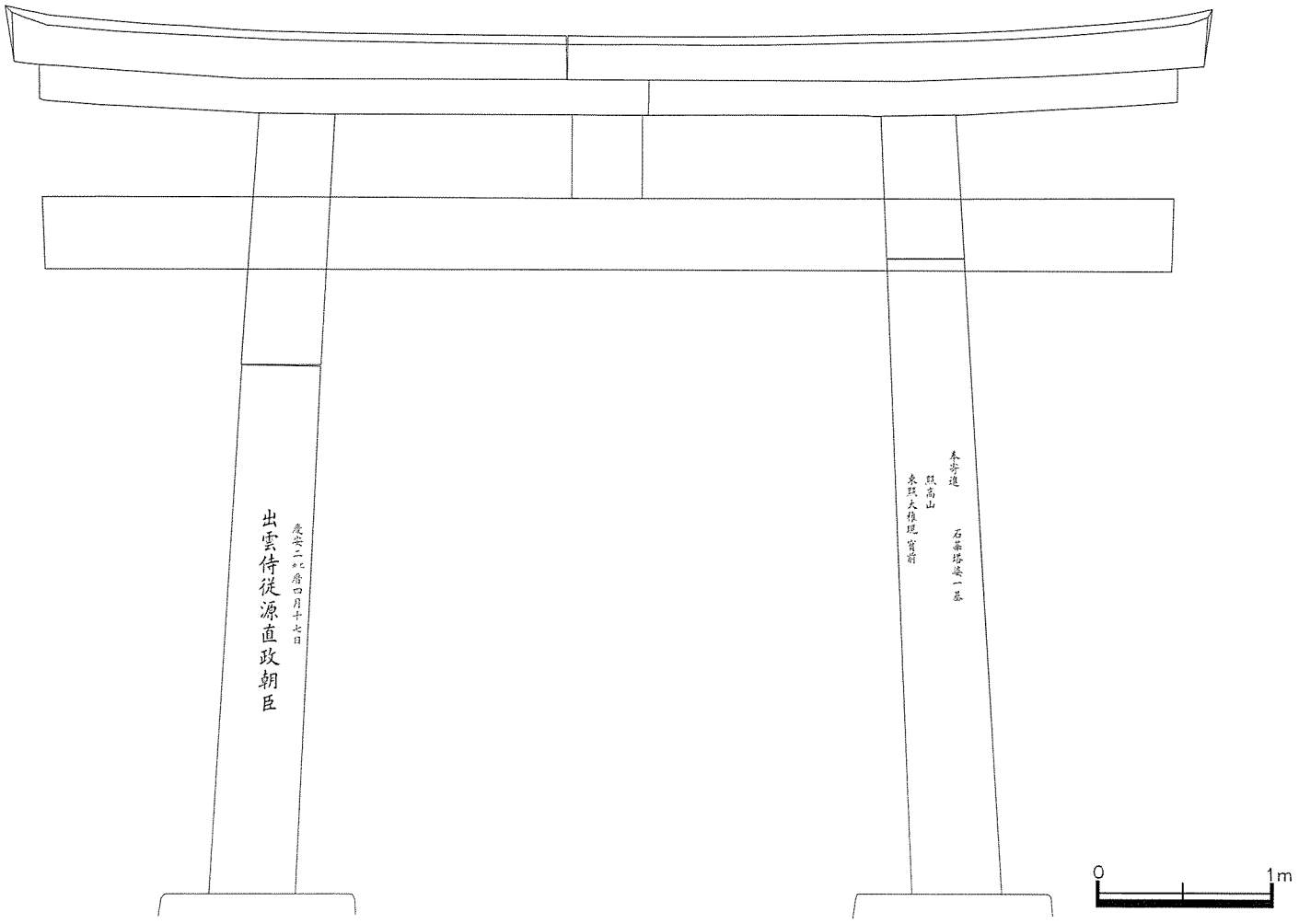


図２　松平直政寄進鳥居実測図

⑵ 元治二年四月十七日銘灯籠

元治二年（1865：慶応元年）四月十七日銘灯籠は、北側（松江城本丸側）から入る参道両側に据えられている。東照宮にあったもので[1]、松江神社に移されたものである。

宝珠から基壇までの総高 2.92 mを測る。全体的に風化が進んでいるが、製作当初の形態を保っている。石質は、出雲市久多美町産の久多見石（黄褐色軟砂岩）と思われる。

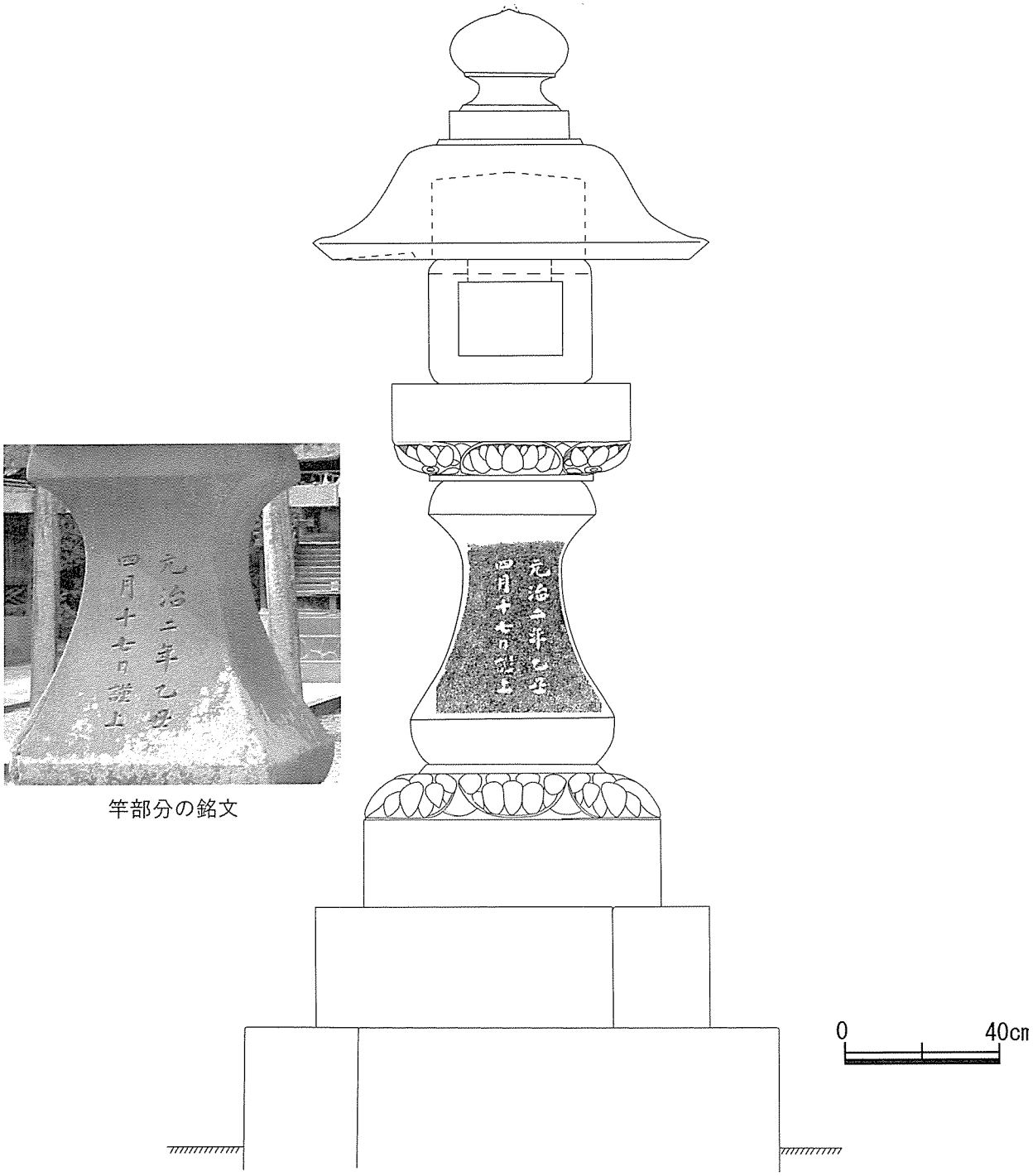
宝珠は、高さ 33.6 cm、最大径 30.4 cmを測る。先端部を欠失する。下部に一辺 30.4 cmの方形台部を設ける。

笠は、高さ 31 cm、軒先端部 102 cmを測る。上部から軒先に向けて急傾斜する。笠の内面は高さ 17.6 cm、横幅 40 cmの刳り込みを設ける。

火袋は、高さ 31.8 cm、幅 41.6 cm。上下両端は丸味を帯びる。内側に縦 18.8 cm、横 26.4 cmの方形の窓を設ける。火袋の内面上部は、横幅 21.6 cmほど刳り込まれ上へ空いている。

中台は、高さ 24.8 cm、一辺 61.2 cmを測り、下部に葵紋を一辺で３単位彫り込む。

竿は、高さ 73 cm、瓢箪の変型で、上部屈折点の幅は 42.4 cmを測る。下部屈折点の幅は 52 cmを測る。中央部正面に「奉献」、裏面に「元治二年乙丑　四月十七日謹上」と刻んである。



竿部分の銘文

図３　元治二年四月十七日銘灯籠実測図

基礎は、高さ 34.1 cm、一辺 76 cmを測る。上部に葵紋を一辺で３単位彫り込む。

基壇は２段積む。上段は、高さ 31 cm、一辺 101 cmを測る。厚み 24.5 cm程度の直方体の石を４個組み合わせる。下段の石は、地面に入り込み深さは不明。地上高は 33 cm。一辺は、137 cmを測る。厚み 29 cm程度の直方体の石を４個組み合わせる。

伊藤菊之輔『出雲の石造美術』1965 に旧東照宮跡の石燈籠として写真とともに紹介されており、昭和 40 年（1965）ごろまでは旧東照宮跡（松江市西尾町）に建っていたことが分かる。松平直政寄進の鳥居と同時期に、松江市立女子高等学校校舎建設に伴い移転されたものである。

(刻字の拓本については文化財課嘱託の荻野哲二氏の協力を得た。記して感謝の意を表する。)

注１　上野富太郎、野津静一郎『松江市誌』1941、伊藤菊之輔『出雲の石造美術』1965

⑶ 手水舎と手水鉢

手水舎の説明板によれば、「東照宮の手水舎にして寛永十六年（1639）に松平直政公の命によって建築されたもので、大工棟梁は渡辺加兵エ尉、藤原好真の作と云う。明治三十年（1897）十月現在ある本殿拝殿と共に、この地に移築した」とある。[1] 現在、木造檜皮葺の手水舎と、屋根下に自然石の手水鉢が据えられている。

手水舎は高さ3.1ｍ、屋根は檜皮葺の寄棟造りで、正面軒先幅4.0ｍ、奥行き3.5ｍ、棟に装飾を施した来待石製の棟石1個を載せる。四柱は全て10㎝幅の角材で、正面柱間は2.25ｍ、奥行き1.68ｍである。

手水鉢は緑がかった自然石（波の浸食を受けたような堆積岩）で、高さ85㎝、上面から底に向かって細くなる形態である。上面の横幅1.82ｍ、縦幅1.2ｍ、水穴は横幅85㎝、縦幅58㎝、深さ20㎝、底の横幅130㎝である。

⑷ 北側参道の鳥居

北側参道の鳥居は明治35年（1902）に奉納されたもので、北側（松江城側）に向く参道入口に据えられている。花崗岩（三刀屋御影石）製の明神鳥居で、２本の柱の上に２本の石材を組み合わせた笠木、島木を渡し、その下に貫を入れ、貫と島木の間に額束を建てている。笠木上面は屋根形に加工し、中央から両端に向けて緩やかに反り上がり、笠木、島木の両端は内側に向かって斜めに切り落としている。柱は内向きに傾き、両柱下部は根巻石で固定している。

左柱には「明治三十五年十月建之」「大原郡斐伊邨　石工種藤市」、右柱には「発起人　坂田金太郎」の銘文が刻まれており、この鳥居が明治35年10月に発起人坂田金太郎等によって寄進されたこと、石工が大原郡斐伊村（現雲南市）種藤市であつたが分かる。また、両柱には3段に分けて寄進者銘が刻まれており（表２）、明治35年頃の状況を示している。元は神社正面に据えられていた。

注１　朝酌郷土誌編集委員会『朝酌郷土誌』2001の「松江東照宮」の項に、手水舎について、『松江神社記略』によるとして、「手水舎　西尾村の東照宮にあったものを、御社殿とともに移築されたもので、大工棟梁渡部加兵衛好真の作である。昭和十年京都御所勤務古建築研究家川上邦基氏より、稀代の名作であると称賛をうけた屋舎である。」とある。

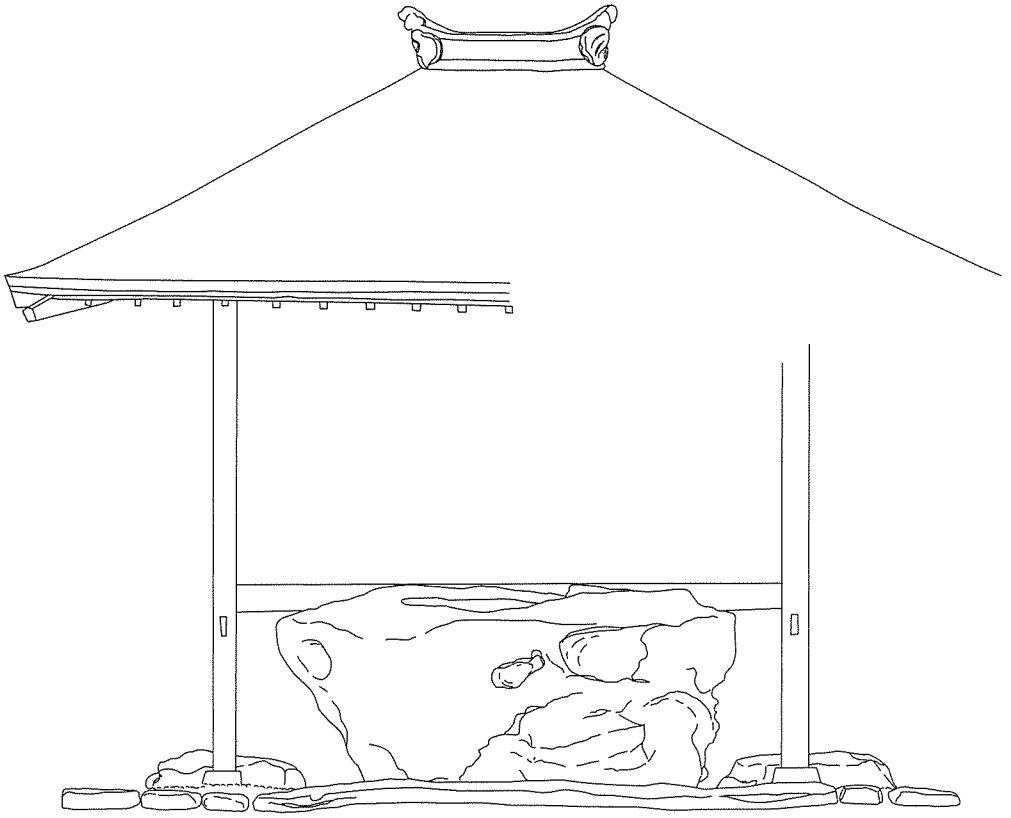


図４－１　手水舎、手水鉢実測図（立面図）

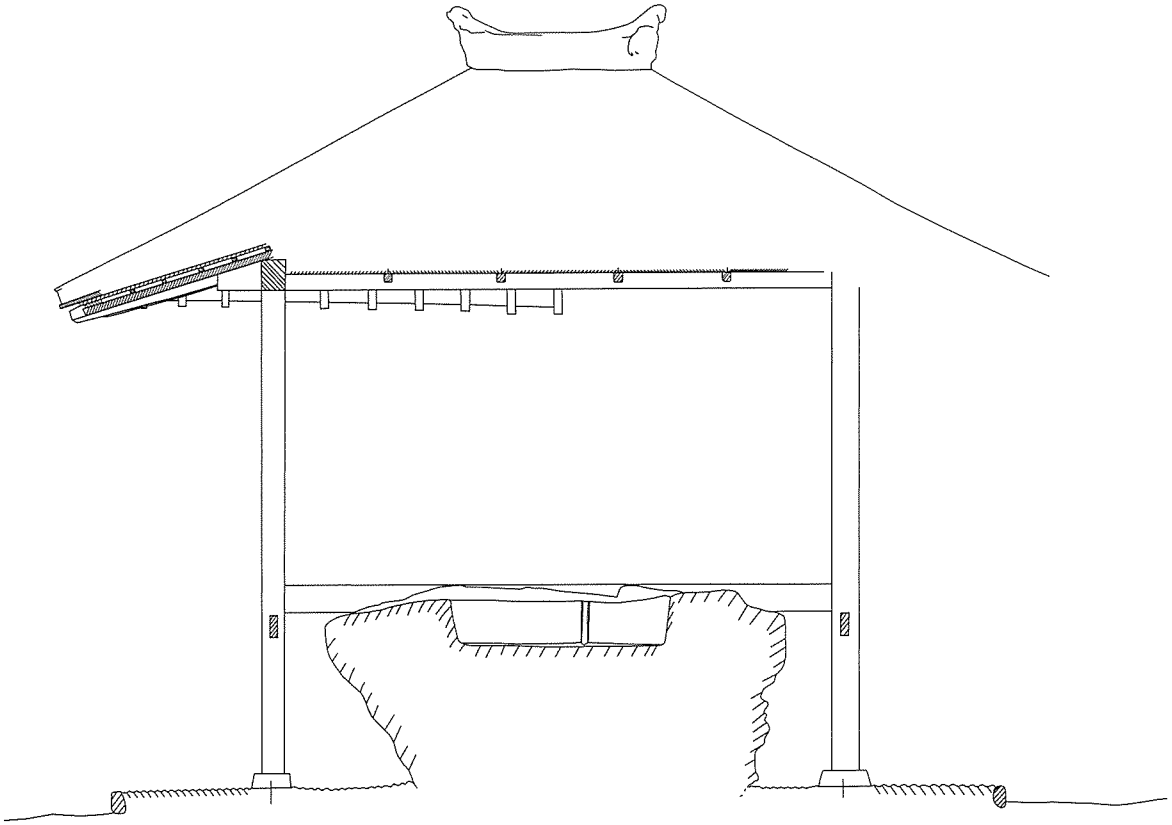


図４－２　手水舎、手水鉢実測図（断面図）

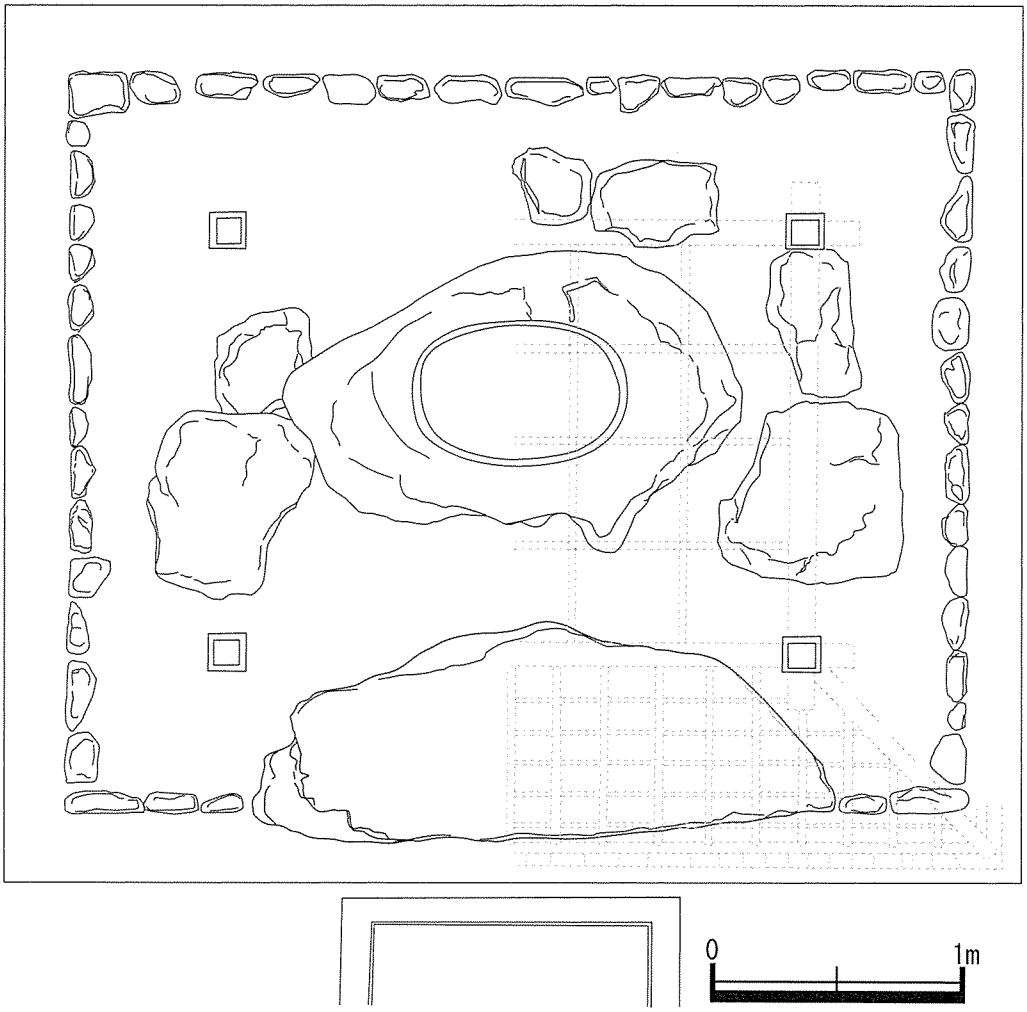


図４－３　手水舎、手水鉢実測図（平面図）

表１　松江神社の石造物一覧

No.	西暦	和歴 年	干支	月日	種類	銘文	石材	備考
1	1649	慶安2年	己丑	4月17日	鳥居	(左柱)慶安二 己丑暦四月十七日　出雲侍従源直政朝臣(右柱)奉寄進　石華表一基　照高山　東照宮大権現寶前	花崗岩	東照宮伝来
2	1967	昭和42年		12月	再建碑	華表再建　昭和四十二年十二月	花崗岩	
3					唐獅子(右)		来待石	
4					唐獅子(左)		来待石	
5	1907	明治40年		6月5日	灯籠(右)	(表)奉献(裏)明治四十年六月五日　石工奥原熊太郎	来待石	
6	1907	明治40年		6月5日	灯籠(左)	(表)奉献(裏)明治四十年六月五日　石工奥原熊太郎	来待石	
7					灯籠	(台座)神谷金之助　神谷浩之助	来待石	
					手水鉢		自然石	東照宮伝来
8					灯籠		来待石	
9					灯籠		来待石	
10	1877	明治10年	丁丑	6月	灯籠	(表)奉献(裏)明治十丁丑年六月吉日(台座)松江市南田　旧藩士	来待石	
11	1879	明治12年		5月5日	灯籠	(表)奉燈　陸軍大尉正七位勲五等造(裏)明治十二年五月五日	来待石	
12	1877	明治10年	丑	10月	灯籠	(表)奉献(裏)明治十年丑十月	来待石	
13					神社名柱	(正面)縣社　松江神社(右)祭神　旧藩祖贈従三位松平直政公	花崗岩	
14	1902	明治35年		10月	鳥居	(左柱)明治三十五年十月建之　大原郡斐伊邨　石工種藤市(右柱)発起人　坂田金太郎	花崗岩	
15	1865	元治2年	乙丑	4月17日	灯籠(右)	(表)奉献(裏)元治二年乙丑　四月十七日謹上	来待石	東照宮伝来
16	1865	元治2年	乙丑	4月17日	灯籠(左)	(表)奉献(裏)元治二年乙丑　四月十七日謹上	来待石	東照宮伝来
17					灯籠		来待石	
18					灯籠		来待石	
19	1895	明治28年		1月1日	鳥居(稲荷社)	明治二十八年一月一日　松本□次郎　同□□建設	花崗岩	

表２－１　北側参道の鳥居寄進者銘文

正面右

一段目	二段目	三段目	四段目
松本貞太郎	大橋為右エ門	安藤只七	発起人
佐藤善八郎	乙部隆之助	佐々木元右エ門	坂田金太郎
三井藤兵エ	神谷源五郎	上田□蔵	
島根縣農工銀行	三谷権太夫	坂倉仁平次	
香西武	有澤昇	生松元愷	
勝部建之助	柳多元治郎	羽山繁雄	
木幡久右エ門	原田和一郎	濱村為成	
西川自省	西代善太郎	八戸野庸志	
岡崎運兵エ	西尾藤三郎	津田太郎	
小川善□	金澤傳十郎	岡村鐵弥	
	田野俊実	大野助一	
	田野光一郎	落合浚一郎	
	高橋慶太郎	渡部半兵エ	
	滝川杢之助	加藤清	
	□澤太郎	蒲生鑑市	
	山本誠兵エ	吉見寛	
	山口卯兵エ	高城禎生	
	藤田幸年	早田豊一郎	
	小河秀雄原	常松之茂	
	向坂弘	永井卓一	
	諏訪部為郎	八木半□	
		福井順蔵	
		布施樫當	
		足羽中次郎	

表２－２　北側参道の鳥居寄進者銘文

正面左	一段目	二段目	三段目	
明治三十五年十月建之	山久瀬儀三郎	新田嘉太郎	石田喜一郎	表　常松之謹書
	福岡世徳	廣部卯助	犬山龍叟	
	木谷方之助	布野徳市	春木周七	裏　大原郡斐伊邨
	森茂美	田中乕三郎	原文平	石工種藤市
	松谷惣太郎		西尾松太郎	
	石倉傳左エ門	大谷善之助	勝谷半之助	
	原巽	山本権七	加納傳右エ門	
	白石伊蔵	布施鉞太郎	神門廣助	
	織原万次郎	鬼村節郎	米田金五郎	
	吉本幾太郎	古瀬忠太郎	佐原武□□	
	中村長之助	古志伴蔵	髙橋貞太郎	
		安達為三郎	長岡住右エ門	
		湯原乕三郎	村田□助	
		南拾番	野津善七	
		三原紋右エ門	野津源太郎	
		宮本忠助	野津嘉兵エ	
		三□□之助	山根榮太郎	
		清原宗太郎	松田林蔵	
		清原宮太郎	船越□重□	
		隅村邦次郎	福島源七郎	
		森助甚右エ門	福間□蔵	
		上代達右エ門	布野重右エ門	
		新善助		

３．ホテル一畑の大灯籠

ホテル一畑の大灯籠は総高約 3.8 m、高さのある堂々たる春日型灯籠で、宝珠、笠、火袋、中台、竿、基礎からなる。石材は、見たところ差し渡し 5 ㎜前後の目の粗い鉱物で構成される花崗岩であるが、出雲地方では見かけない。

宝珠は、高さ 40 ㎝、最大径 52 ㎝を測り、肩部がやや角張る。請花は高さ 22 ㎝、最大径 53.6 ㎝を測り、高さ 17 ㎝の範囲に簡略化した８つの蓮弁紋を廻らす。

笠は、六角形で、高さ 61.2 ㎝、上端径 84 ㎝、蕨手先端部径 132 ㎝、下端径 114 ㎝を測る。反りはよく、蕨手の巻き込みは強いが、先端部の風化、欠落が著しい。

火袋は、六角形で、高さ 60.8 ㎝、一辺 40.4 ㎝を測る。輪郭線は、上下端手前で大きく曲がり全体的に丸みを帯びる。最大径は、中位で 81.2 ㎝を測る。各窓は、縦 38 ㎝、横 30 ㎝の縦に長い長方形の浅い刳り込みがあり、内２窓は透かしとなっている。窓は、透かしの底面から 9 ㎝ほど上で火袋の中心部に向けて斜めに 8 ㎝上がっていく。他の４面には、８弁の菊花紋様を２面に、矢羽根状で内側に溝を彫った十字紋を２面に浮き彫りしている。

中台は、高さ 36.4 ㎝。上半部は、六角形で高さ 17.2 ㎝、一辺 54 ㎝を測る。内側に隅丸の格狭間を刳り込む。下半部は、高さ 19.2 ㎝、全周に８つの複弁蓮弁紋を半肉彫で表す。１単位の幅は 32 ～ 33 ㎝である。

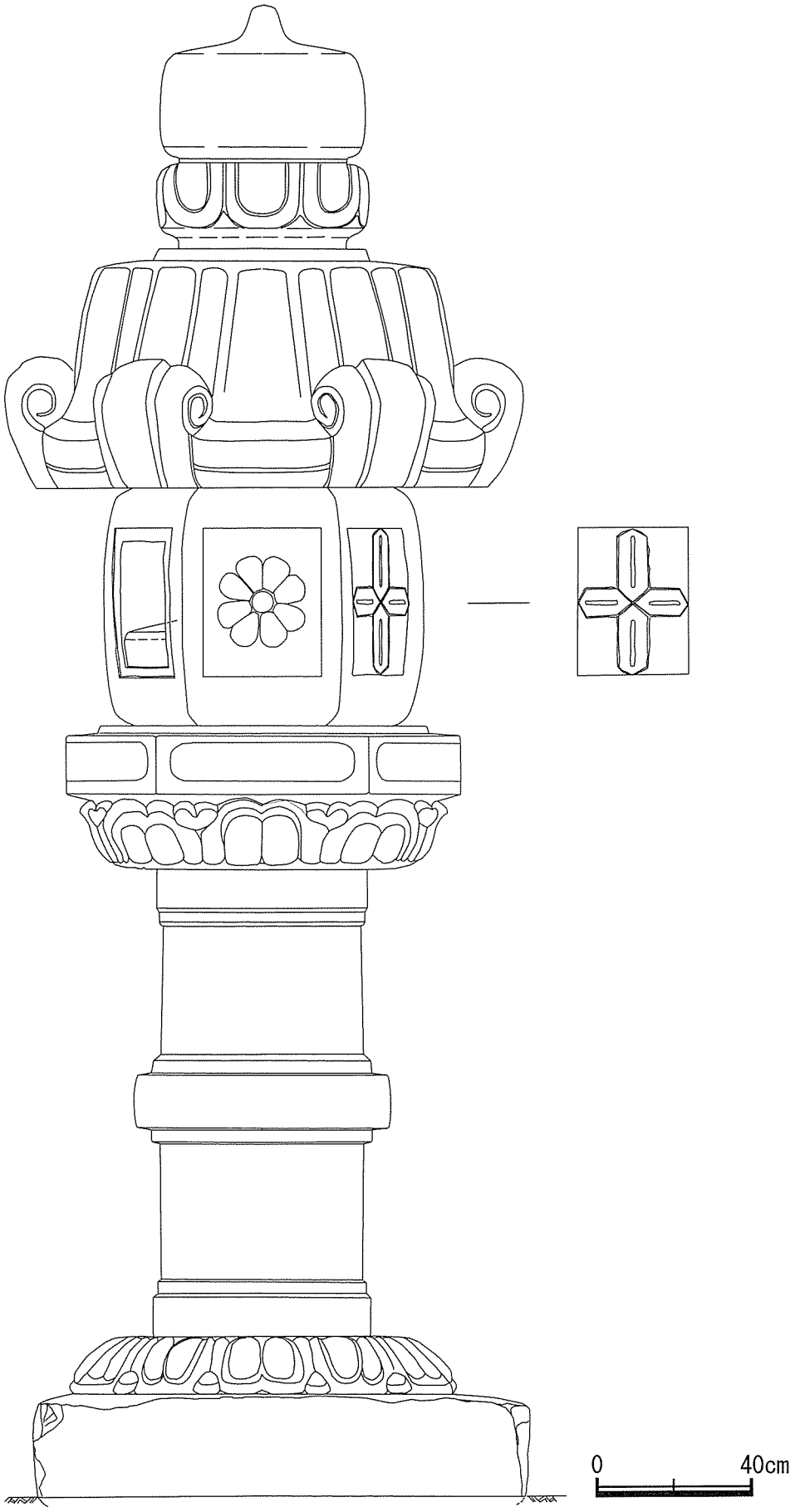


図５　ホテルー畑の大灯籠実測図

竿は、高さ119.6cmで、中膨れとなる。上端部の直径53.6cm、下端部の直径55.2cm、中位の大帯(節)は縦14.4cm、直径65.2cmを測り、上下に段を1つずつ設ける。さらに上、下端部から10cmの部位にそれぞれ段を1つ設ける。

基礎は、高さ14.8cm、上端径76cm、下端径96cmを測る。全周に8つの複弁蓮弁紋(反花座)を半肉彫で表す。1単位の幅は27cm前後である。

基壇は、地面からの高さ26cm、差し渡し126cmほどで粗割り、荒加工のままである。

圓流寺にあったこの灯籠は、昭和40年(1965)の女子高造成の折、売却された。まず母衣町のスーパーふくしまの北側川辺に移ったという。次に、内中原町の個人邸に行き、昭和50年代になって、ホテル一畑が渡部善之助社長時代に購入し、以来本館前西側のガーデン芝生地の南端に建てられている。欠失部各所は、樹脂に砂を混ぜて修復されている。

当初は1対で建っていたと思われる。これとそっくりではないかと思われる大灯籠が伊藤菊之輔著『続出雲の石造美術』に紹介されている。それによれば「旧岡崎別邸の六角型燈籠　松江市殿町　旧岡崎別邸(現島根県農業共済組合連合会)に、はだの柔らかな大型燈籠がある。高さ三・五米、宝珠は高く大きく先端は尖っている。笠もグロテスクと思われるほど高く大きく、火袋には菊や十文字が彫ってあるが、頑丈そのもので、中台下の蓮華は美しいが、基礎の反花は拙く、後補かと思われる。俗に梨子目みかげといわれ。柔軟な欠点があるが、量感ゆたかな偉容をもつ燈籠である。」とある。

両者を比較してみると、高さ3.5mとされたのは、基壇を除けばほぼ同じ高さとなる。火袋に表現された菊や十文字の装飾も同じではないかと思われる。掲載されている写真を見ても、全体の姿、形はよく似ており、これが対になるもう一方の大燈籠ではないかと考えられる。また、『朝酌郷土誌』によれば、「現在ホテル一畑の庭園に、四メートルもあると思われる古灯籠が立っている。これは地元では東照宮にあった対の大灯籠の一つだという。同ホテルでは、堀尾吉晴が豊臣秀吉から拝領した灯籠と伝えられることから、保存加工して大切にしている。東照宮と圓流寺は堀尾忠晴の創建であり、富田城下に保存されていたものを、圓流寺へ運んだとも考えられ、もしそうだとすれば、これだけでも松江藩主の東照宮への心入れが察せられる。」としているが、拝領云々の話については、真実のほどは分からない。

4. 圓流寺の板碑

東照宮、圓流寺のあった丘陵(現松江市立女子高等学校)の麓に鉄筋コンクリート造の現在の圓流寺があり、徳川将軍や圓流寺住職の位牌などがある。建物の前方と後方に花崗岩製の板碑が3基残されている。建物前方の板碑を1号、後方の板碑を建物に近い順に2号、3号と呼ぶ。いずれも天保3年(1832)の紀年銘をもつ。

(1) 圓流寺1号板碑

1号板碑は、やや赤みがかった花崗岩製で、総高130cm、2段の同じ花崗岩製の基壇上に板碑が乗る。板碑は高さ94cm、幅43cm、厚さ18.5cm、上端部を高さ5.5cmほどの蒲鉾形に加工している。上段の基壇は高さ18cm、幅63cm、奥行き39.5cm、下段の基壇は高さ18cm、幅100cmである。

板碑の正面には「南無薩達麼芬陀梨迦蘇多覧」、裏面には銘文と「天保三壬辰春」の紀年銘が刻まれている。1号板碑裏銘文は次のとおりである。

（１号板碑裏銘文：原文は縦に刻む）

師名豪教不詳□□初住鰐山密厳院寛永中　茆命□戻
此山開基畢
東照神宮廟祭祀事是謹相傳師生平特法事延寛至讀誦
一萬三千部其延可□也延寶六年戊午六月十四日示寂
葵鰐山云子誰不敏承之奉職各年于此因縁真事文延其
名湮成也皎記貽攴□焉銘曰
讀誦攴□　殞有舌存
淡徳可尚　足春浚是
天保三年壬辰春　　沙門慈空合□

⑵ 圓流寺２号板碑

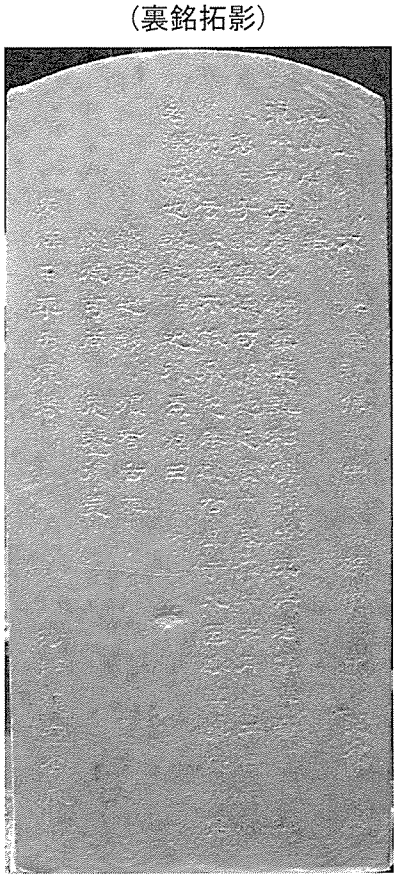
２号板碑は、やや赤みがかった花崗岩製で、下部は土中に埋まっている。板碑は高さ 140 cm以上で、幅 40 cm、厚さ 16 cm、上端部を高さ６cmほどの蒲鉾形に加工している。

板碑の正面には梵字と「神」、「天保三壬辰春」の紀年銘が刻まれているが、裏面に銘文は刻まれていない。

⑶ 圓流寺３号板碑

３号板碑は、やや赤みがかった花崗岩製で、自然石の基壇上に板碑が乗る。板碑は高さ 86 cm、幅 40 cm、厚さ 15 cm、上端部を高さ５cmほどの蒲鉾形に加工している。板碑の底部には幅 17 cmのホゾを造り付け、基壇には同幅のホゾ穴を穿って板碑を建てている。

板碑の正面には梵字と「荒神」、裏面には梵字と「天保三壬辰春」の紀年銘が刻まれている。



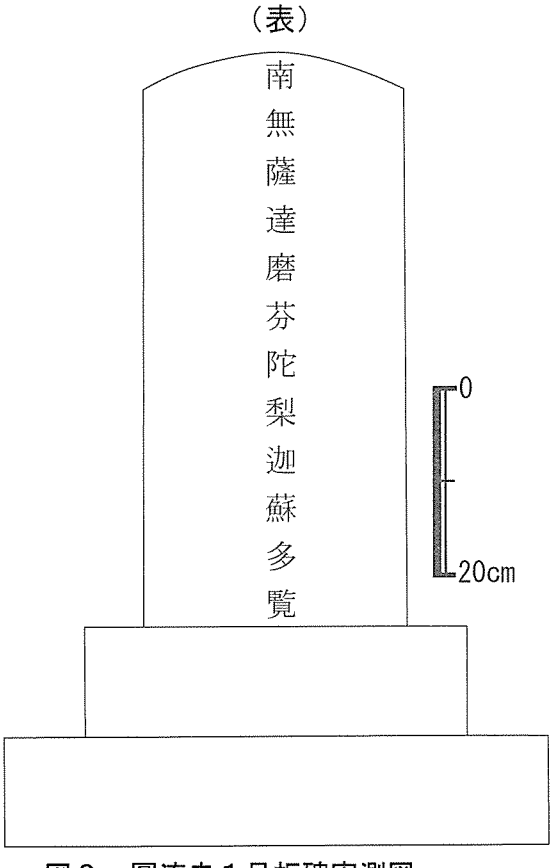


図６　圓流寺１号板碑実測図

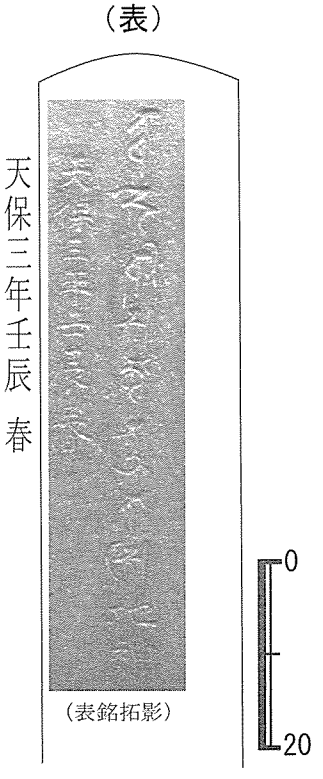
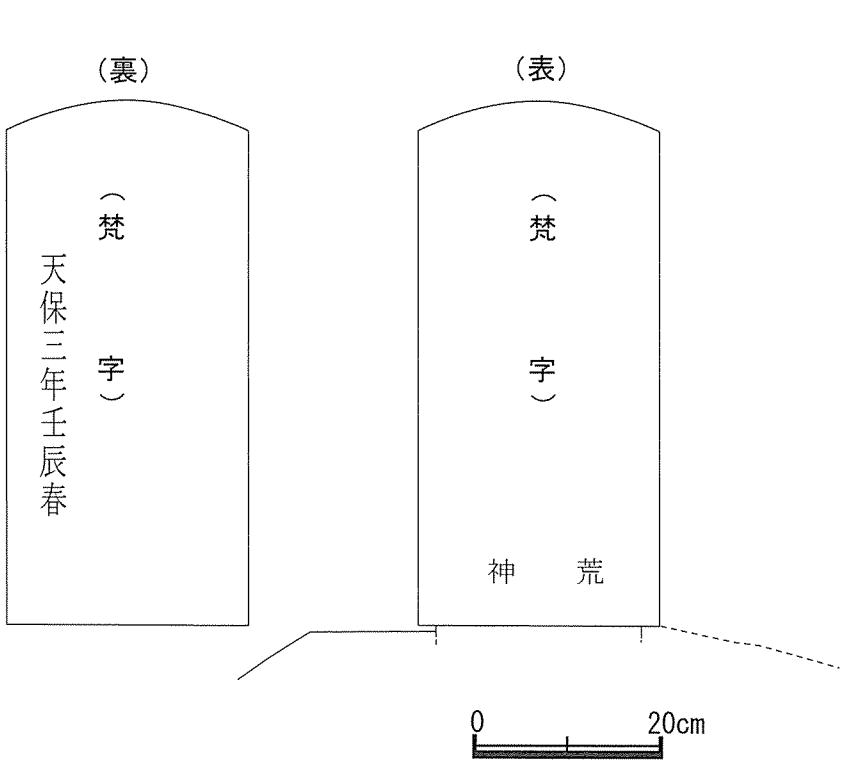


図７ 圓流寺２号板碑実測図



（表銘拓影）

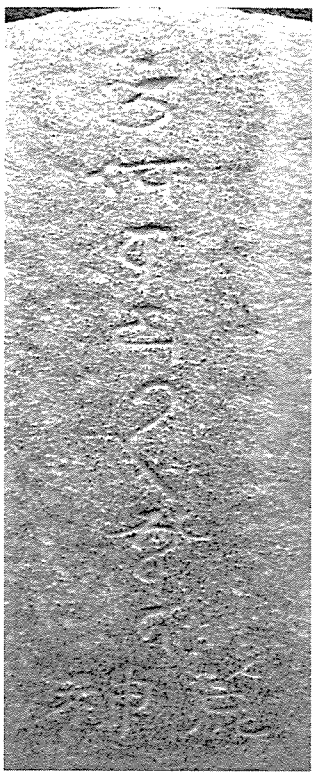


図８　圓流寺３号板碑実測図

表３　圓流寺住職位牌一覧（圓流寺蔵）と無縫塔（墓石）の所在

	位　牌（表）	位　牌（裏）	鰐淵寺無縫塔配置
1	(梵)當寺開基大阿闍梨竪者法印豪教 和尚位	延宝六戊午年六月十四日	等樹院
2	(梵)當寺第二世大阿闍梨竪者法印豪豫 和尚位	寛永十癸酉天三月七日	
3	(梵)當寺第三世大阿闍梨竪者法印盛傳 和尚位	天和二壬戌年十月八日	
4	(梵)當寺第四世大阿闍梨竪者法印傳與 和尚位	元禄十五年午七月十八日	
5	(梵)當寺第五世大阿闍梨竪者法印榮胤 和尚位	正徳五未年三月十八日	是心院
6	(梵)當寺第六世大阿闍梨竪者法印寂海 和尚位	享保廿一辰年二月八日	等樹院
7	(梵)當寺第七世大阿闍梨竪者法印慧勇 和尚位	宝暦九巳卯天正月七日	
8	(梵)當寺第八世権大僧都竪者法印胤澄 和尚位	明和元申年十二月八日	
9	(梵)當寺第九世大阿闍梨竪者法印義湛 和尚位	安永五丙申年三月四日	松本坊
10	(梵)當寺第十世大阿闍梨竪者法印智龍 和尚位	寛政十年戊午正月十八日　行年七十二終	松本坊
11	(梵)當寺第十一世大阿闍梨竪者法印達海 和尚位	寛政五癸丑年仲冬廿三日	
12	(梵)當寺第十二世権大僧都竪者法印智順	文政五壬午八月八日　行年七十一終	松本坊
13	(梵)當寺第十三世大阿闍梨竪者法印性寂 和尚位	文政五年壬午三月六日　行年六十七終	
14	(梵)當寺第十四世大阿闍梨竪者法印慈空 和尚位	天保八丁酉歳三月四日　行年七十五終	是心院
15	(梵)當寺第十五世大阿闍梨竪者法印泰道 和尚位	天保十四癸卯年三月廿五日　行年六十五寂	是心院
16	(梵)當寺第十六世大阿闍梨竪者法印孝順 和尚位	弘化三丙午年十月二日	松本坊
17	(梵)當寺第十七世大阿闍梨竪者法印大空 和尚位	弘化四丁未年九月七日	是心院
18	(梵)當寺第十八世大阿闍梨竪者法印諦信 和尚位	安政元甲寅十二月十七日寂　行年三十七	
19	(梵)當寺第十九世大阿闍梨竪者法印心海 和尚位	明治卅年九月十一日卒 敬田院耕得一乗居士居 俗名村田耕一	
20	僧覺湛大和尚位	明治十二年九月廿七日 清浄院殿殿沓闇晏居士 行年七十有一俗名高橋伴造	松本坊（僧正慰湛大和尚）
	三界萬霊有縁無縁等	智春聖人不退位	

5．鰐淵寺の石塔

鰐淵寺（出雲市別所町）は天台宗の寺院で、伝承では推古天皇２年（594年）、信濃の智春上人が当地の浮浪の滝に祈って推古天皇の眼疾が平癒したことから、同天皇の勅願寺として建立されたという。

圓流寺の住職は、開山豪教を始め、歴代が鰐淵寺から出ており、鰐淵寺には圓流寺住職を勤めた僧侶の無縫塔（墓石塔）などが残されている。圓流寺周辺では住職の無縫塔などが確認できないことから、鰐淵寺の出身寺院の墓所に葬られたと考えられる。

圓流寺住職の無縫塔は仁王門の東側の丘陵斜面で、西林木町（出雲市）から鰐淵寺に抜ける旧道沿いにある鰐淵寺僧侶の墓石群の中に所在する。今回調査した墓石群は三段に分かれており、上段が松本坊、中段が是心院、下段が等樹院の僧侶の墓所である[1]。

等樹院墓石群は、32以上の石塔からなり、幅約20ｍ、奥行き約10ｍほどの平坦地山ぎわに幅約17～20ｍ、奥行き約１～２ｍほどの石積み基壇を設け、その上に無縫塔を中心とする石塔を配置している。石塔群のある平坦地内を鰐淵寺から西林木町の霊雲寺脇に抜ける旧道が通り、東に向かって中段（是心院）、上段（松本坊）の石塔群に至る。

(1) 前圓流寺阿闍利竪者法印榮胤塔（是心院（中段）墓石群）

圓流寺第五世榮胤の石塔は中段の是心院墓石群中央に位置する。総高106㎝、塔身、基礎、基壇からなり、いずれもやや赤みがかった花崗岩である。

塔身は高さ67㎝、上部の最大経35㎝、最下部の経22㎝、頂部は宝珠状に加工されている。正面は高さ53㎝、幅10.5～13.5㎝ほど一段削り、その中に「正徳五乙未」「(梵字) 前圓流寺阿闍梨竪者法印榮胤大和尚位」「三月十八日」と刻む。基礎は高さ15㎝、側面に請花を廻らし、頂部の経33㎝、底部の経22.5㎝である。基壇は高さ24㎝、幅23㎝である。

(2) 圓流寺開基豪教塔（等樹院（下段）墓石群）

豪教塔は圓流寺開基（山）豪教のために、明治10年（1877）に没後200回の追業として圓流寺20世覚湛が再建したもので、等樹院墓石群の正面右寄りにあり、総高172㎝、２段の基壇の上に自然石の石碑を載せる。

石碑は高さ95.2㎝、幅約35㎝、厚さ約25㎝で、正面に梵字と「圓流寺開基豪教塔」、裏面に「延宝六戊午年六月十四日遷化　明治十丑年正當二百之追業圓流寺二十世覺湛再建之」と刻む。基壇は石碑と同石材の切石である。上段の基壇は１石の高さ40㎝、幅68㎝、奥行き50㎝、下段の基壇は３石で、高さ37㎝、幅は正面右から約17㎝、約46㎝、約41㎝、奥行きは約83㎝である。

(3) 前圓流寺阿闍利竪者法印寂海墓（等樹院（下段）墓石群）

圓流寺第六世寂海の石塔は、等樹院墓石群の正面左寄りにあり、総高95㎝、来待石製の塔身と花崗岩製の二段の基壇からなる。

塔身は高さ64㎝、上部の最大経31㎝、最下部の経22.5㎝、頂部は宝珠状に加工されている。正面は高さ51㎝、幅７～11.5㎝ほど一段削り、その中に「前圓流寺阿闍梨竪者法印寂海墓」と刻む。裏側には「享保二十一丙辰歳二月八日」と刻む。基壇上段は高さ20㎝、上幅41㎝、下幅42㎝、上面には塔身を請ける加工が施されている。基壇下段は高さ11㎝、幅50㎝である。

塔身は風化が少ないことから作り直された可能性があり、基壇は花崗岩製だが、やや風化気味である。

注１　鰐淵寺住職佐藤泰雄氏の御教示による。

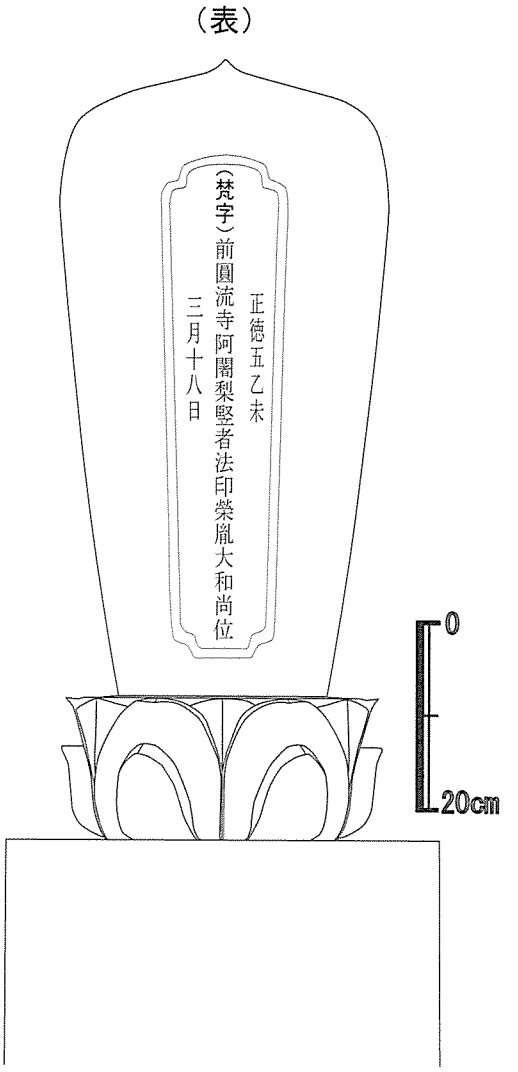


図９　前圓流寺阿闍利堅者
法印榮胤塔実測図

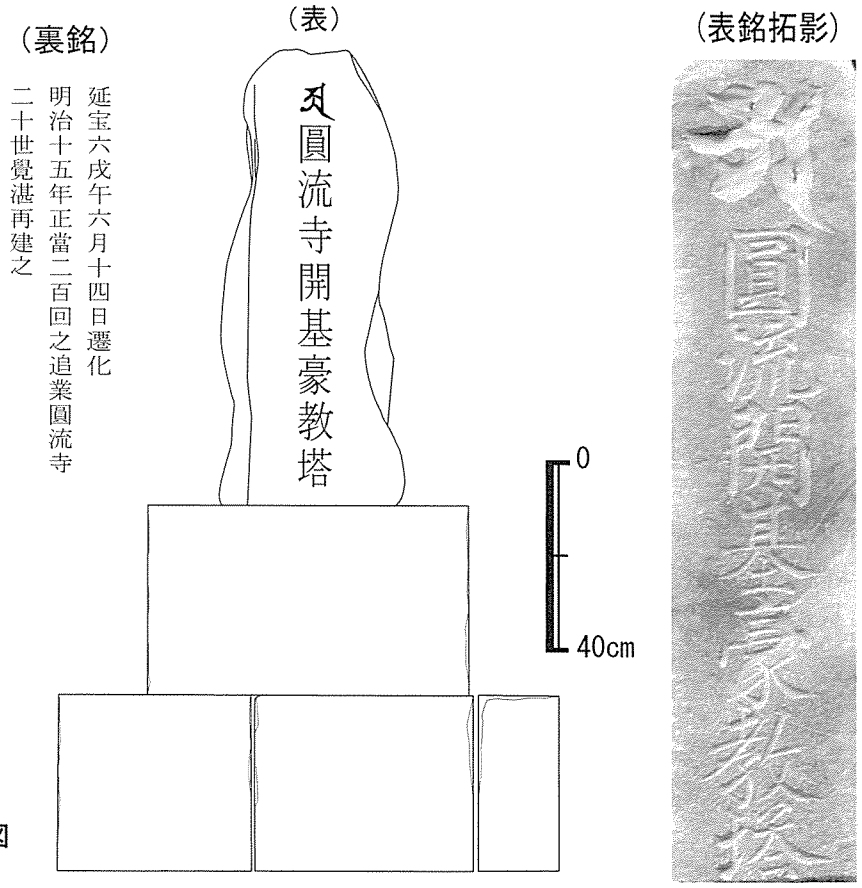


図 10　圓流寺開基豪教塔実測図

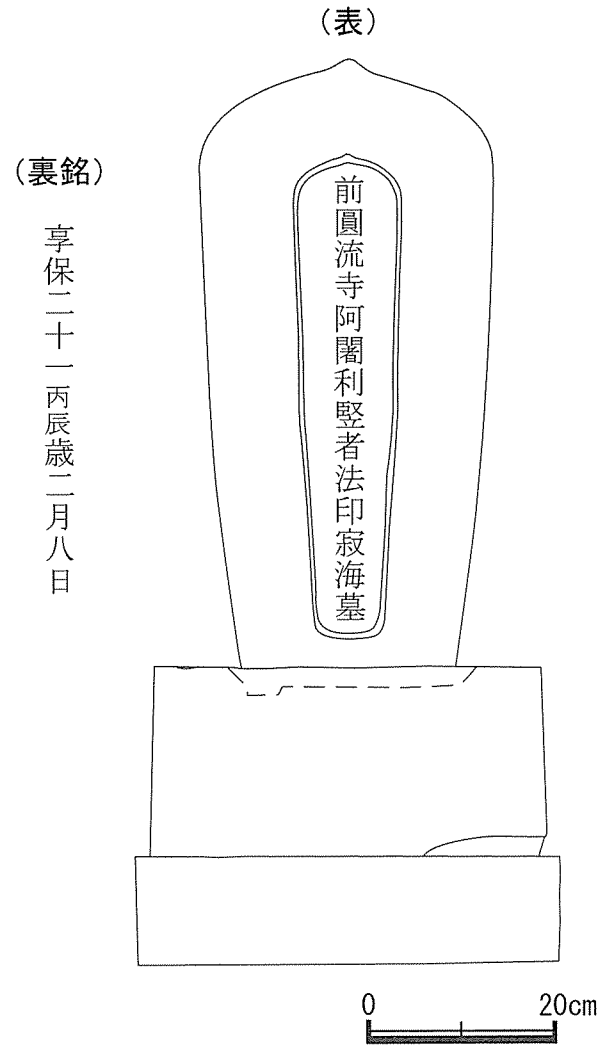


図 11　前圓流寺阿闍利竪者
法印寂海墓実測図

表 4　鰐淵寺所在の圓流寺関係石塔一覧

所在	銘文
松本坊（上段）墓石群	（前面）（梵字）僧正慬湛大和尚
	（背面）比叡山習禅院□淵寺□圓流寺第廿世　万田
	明治廿八年九月廿六日寂行年六十一歳　石工善太郎
	（前面）前圓流寺法印義湛塔
	（右面）弘化三丙午年十月二日
	（前面）（梵字）法□□順塔
	（左面）前圓流寺第十一（十六）世
	（前面）（梵字）法印智龍塔
	（背面）前圓流寺第十世
	（前面）（梵字）法印智順塔
	（背面）前圓流寺第十二世
	文政五年壬午八月八□
是心院（中段）墓石群	（前面）　正徳五乙未
	（梵字）前圓流寺阿闍梨竪者法印榮胤大和尚位
	三月十八日
	弘化四丁未秋九月七日
	壽六十二歳而寂
	（梵字）大阿闍梨竪者法印大空搭
	前圓流寺第十七世
	天保　三月
	前圓流寺第十五世
	（前面）（梵字）大阿闍梨竪者法印慈空搭
	（背面）維時天保八年歳舎丁酉三月四日
	壽七十五寂
	前圓流寺第十四世
等樹院（下段）墓石群	（前面）（梵字）圓流開基豪教搭
	（背面）延宝六戊午年六月十四日遷化
	明治十五年正當二百回之追業圓流寺
	二十世覺湛再建之
	（前面）前圓流寺阿闍梨竪者法印寂海墓

6．その他の石造物（P44 の写真）

(1) 紐解神社の松平定安寄進鳥居（松江市西尾町）

紐解神社にある花崗岩製の鳥居は東照宮伝来のもので、北側柱に「従四位上行左近衛権少将源朝臣定安謹上」、南側柱に「元治二年乙丑四月十七日」とある。これより、松平定安が元治２年（1865）に建てたことが分かる。なお、「昭和４３年復原」と書かれた碑が横に建つ。

(2) 圓流寺と西尾団地との間にある墓

県道に沿って圓流寺と西尾団地との間に高さ 67 ㌢の来待石製の無縫塔が一基ある。表の銘文は風化のために梵字以外は読めないが、裏に「十九才寂慰湛僧正ノ弟子」「明治二十三年寅七月六日」と刻む。なお、東側に隣接して来待石製の墓石があり、正面は風化のために読めないが、側面に「松江藩士高橋氏」「明治十□年九年七日壽七十一而寂」とある。但し、両者の関係は不明である。

(3) 松江市立女子高等学校内の東照宮石碑

明治 45 年（1912）、西尾地区では、旧東照宮跡に「東照宮遺址」の石碑を建立し、旧跡の記憶を残そうとした。石碑は、現在も松江市立女子高等学校内にあり、表面の銘文の一部には剝落が認められる。銘文の翻刻については、『あさくみ郷土誌考』1956 等に掲載されているので割愛する。

7．おわりに

東照宮とその神宮寺である圓流寺に係る石造物について、実測を中心とする調査の概要を報告した。最後に、今回の石造物調査の成果と今後の課題について記しておきたい。

(1) 石材について

東照宮の山上と麓に据えられていた２基の鳥居（松平直政寄進鳥居、松平定安寄進鳥居）は共に花崗岩製である。現在、松江神社に移された慶安２年（1649）銘の「松平直政寄進鳥居」は、やや赤みをもつ花崗岩製で、同質石材と思われる鳥居には、寛永 16 年（1639）に同じく直政が寄進した[1]日御碕神社（出雲市大社町）の鳥居がある。管見の限りでは、やや赤みをもつ花崗岩製の鳥居は出雲地方では類例があまりなく、松江藩などが関わり特別に他地域から搬入された石材と推定される。また、圓流寺に残る板碑も少し赤みをもつ花崗岩で、天保期で新しいものの、他地域から搬入された可能性が高い。なお、紐解神社に移された元治２年（1865）銘の「松平定安寄進鳥居」は、出雲地方で良く見かける白っぽい花崗岩製である。

灯籠については、凝灰質砂岩製（来待石、久多美石）と花崗岩製のものがある。松江神社に移された「元治二年四月十七日銘灯籠」は、表面の剥落状況より出雲市久多美町産の久多見石の可能性が高い。同じ石材の製品としては、松江市外中原町の松平家菩提寺である月照寺の「天隆公（宗衍）寿蔵碑（月照寺：萩野喜内の撰文により宗衍公の治績を刻む）」[2]が著名である。一方、現在の圓流寺前方にある六地蔵や小型の万延２年（1861）銘の灯籠は松江市宍道町産の来待石製と考えられる。「ホテル一畑の大灯籠」は、目の粗い鉱物で構成される花崗岩製で、出雲地方ではあまり見かけない材質である。

(2) 規模について

東照宮にあった鳥居と灯籠については、共に出雲地方では最大級の製品である。鳥居の高さは、

松江神社の「松平直政寄進鳥居」が５ｍ、紐解神社の「松平定安寄進鳥居」が5.1ｍで、灯籠の高さでは、「ホテル一畑の大灯籠」が高さ3.8ｍ、松江神社の「元治二年四月十七日銘灯籠」が2.9ｍを測る。総て藩主により奉られたものであり、松江藩の格式にあった規模を有しているといえよう。

なお、東照宮と比較すると、圓流寺に関わる大型石造物は知られていない。現在の圓流寺には板碑３基（花崗岩製）と灯籠（来待石製：海心和尚建立）１基及び六地蔵（来待石製）が存在し、板碑は高さ１ｍ前後、灯籠も精緻に加工はされているものの小型品で、また、六地蔵も同様に小さいものがある。

⑶ 製作年代について

松江神社の「松平直政寄進鳥居」は慶安２年（1649）の銘をもっており、出雲地方で紀年銘による管見の限りでは、前記日御崎神社の「松平直政寄進鳥居」に次ぐ古さである。因に、東照宮・圓流寺が創建された寛永期の同社寺由来の石造物は今のところ確認されていない。

「圓流寺の板碑」３基は、いずれも天保３年（1832）の紀年銘をもつ。１号石碑の銘文からすると、開基豪教の150年遠忌を記念して、時の住職慈空が建てたものである。

東照宮には、元治２年（1865）銘の「松平定安寄進鳥居（紐解神社）」と「元治二年四月十七日銘灯籠（松江神社）」があり、史料的制約の中で断定はできないが、この年に、東照宮では遷宮等の大きな行事があったのではと推定される。

最後に、課題として歴代圓流寺住職等に関係する石塔調査について記しておきたい。今回、鰐淵寺（出雲市別所町）にある歴代圓流寺住職の無縫塔などの石塔について、３坊（松本坊、是心院、等樹院）の墓地で確認調査を実施し、残された文献史料が少ない中で、圓流寺と鰐淵寺とのつながりを石造物で探るという調査方法の端緒を試みることができた。しかし、確認できた関係石塔は圓流寺歴代住職の約半数分である。鰐淵寺山内に無数に存在すると考えられる石造物の調査はかなりの時間を要すると考えられるが、今後の調査とその成果に期待したい。

注１　伊藤菊之輔『出雲の石造美術』1965

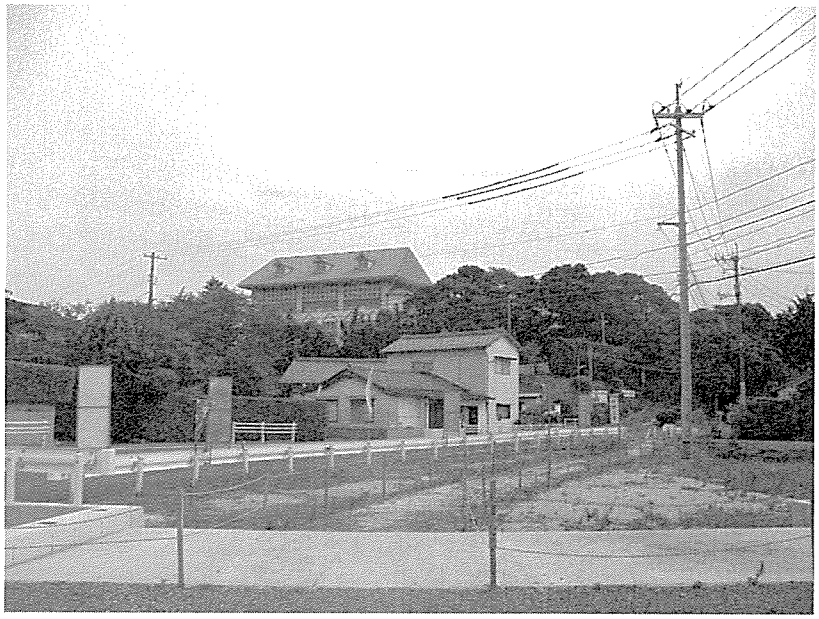
注２　宍道正年『ふるさと久多美から松江へ』2009

[本稿は、平成21年に行った松江東照宮と圓流寺伝来の石造物調査の成果を報告するものである。石造物調査にあたっては、岡崎雄二郎、西尾克己、稲田信、椿真治、木下誠、松尾充晶、高屋茂男があたり、本稿の執筆も分担して行った。図面の浄書は高屋茂男が行った。]

謝　辞

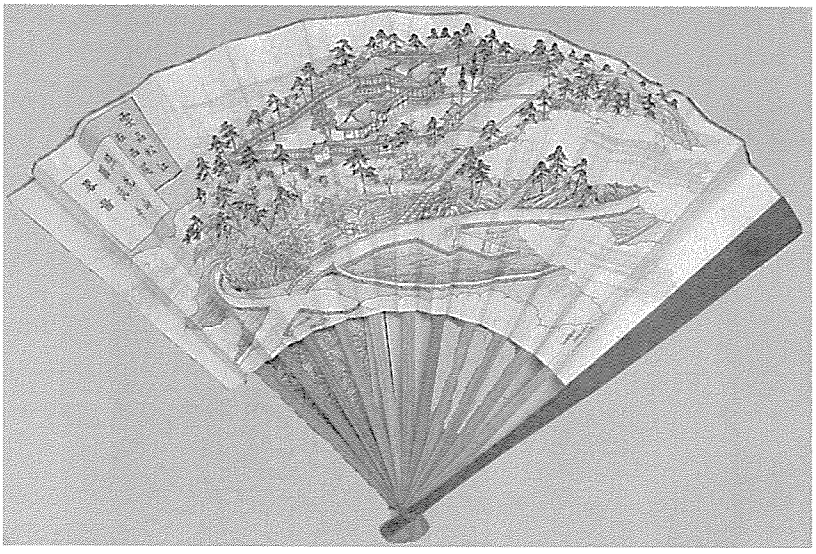
本稿を執筆するにあたり、鰐淵寺住職佐藤泰雄氏、松江神社宮司永岡章典氏、株式会社ホテル一畑常務取締役総支配人尾添敏郎氏、同取締役経営企画室・総務部総括支配人福富茂人氏には、調査に訪れた私たちに対し多大な御便宜と御協力をいただきました。山根克彦氏、米原実氏には圓流寺に関するご教示をいただき、山根氏には更に特別寄稿をいただきました。記して感謝申し上げます。

(おかざき　ゆうじろう)
(にしお　かつみ)
(いなた　まこと)
(つばき　しんじ)
(きのした　まこと)
(まつお　みつあき)
(たかや　しげお)



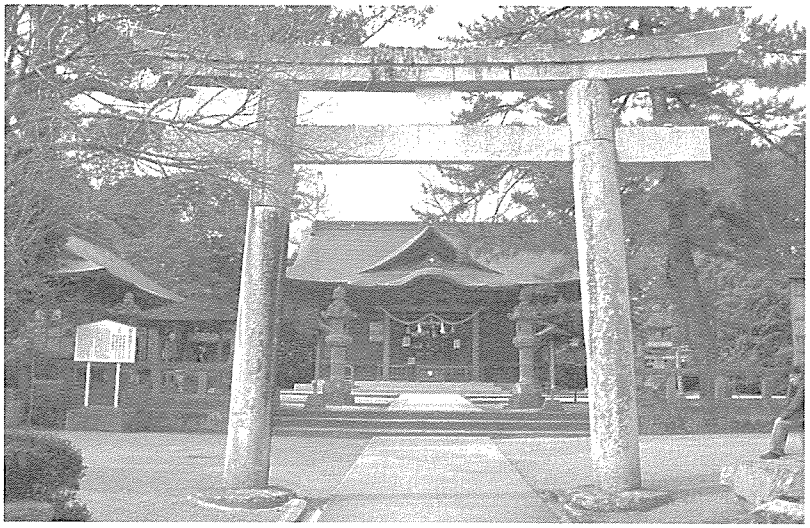
東照宮跡（西から望む）
（現松江市立女子高等学校）

現在の圓流寺堂宇



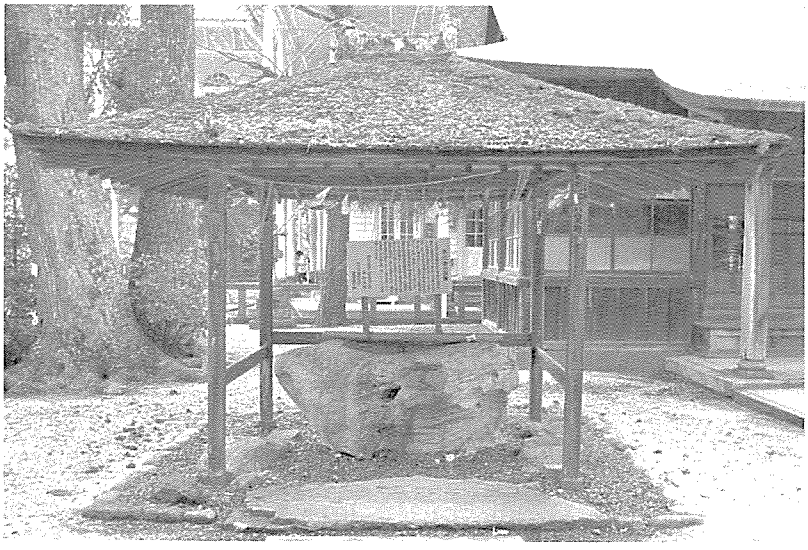
圓流寺が描かれた扇面
（圓流寺蔵）

圓流寺（松江市西尾町）にあった御霊殿と四脚門（昭和 40 年［1965］８月撮影）



松平直政寄進鳥居
（松江神社）

元治二年四月十七日銘灯籠
（松江神社）



手水舎と手水鉢
（松江神社）

北側参道の鳥居と元治二年四月十七日銘灯籠
（松江神社）

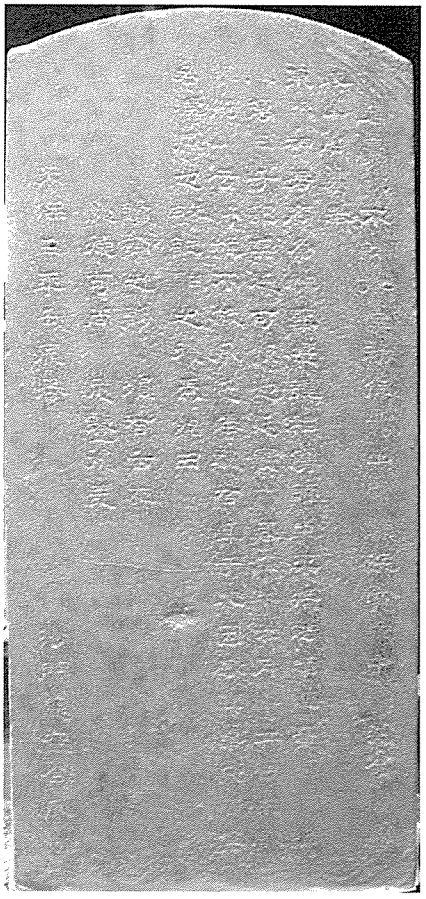
ホテルー畑の大灯籠（遠景）

ホテルー畑の大灯籠

圓流寺１号板碑、灯籠（圓流寺前方）

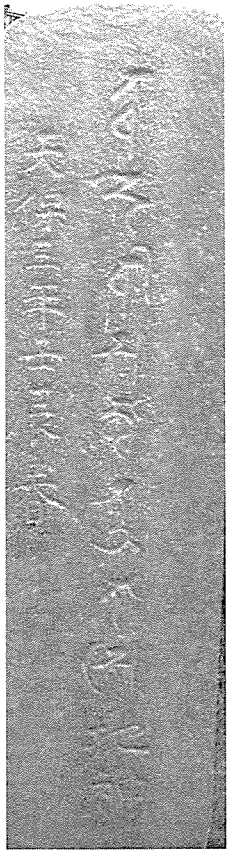
圓流寺２、３号板碑（圓流寺裏）

圓流寺１号板碑



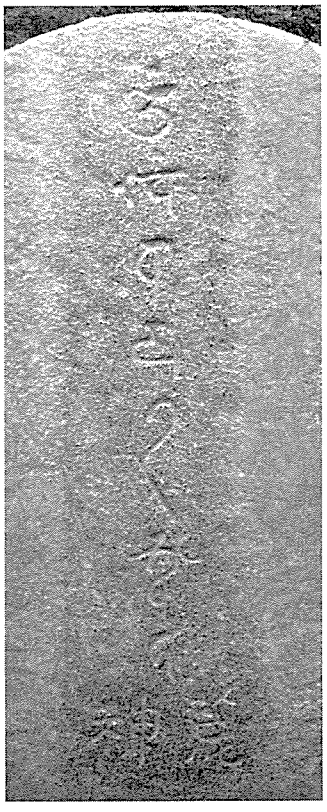
圓流寺１号板碑裏銘文拓影

圓流寺２号板碑



圓流寺２号板碑裏銘文拓影

圓流寺３号板碑



圓流寺３号板碑裏銘文拓影

鰐淵寺松本坊（上段）
墓石群 (1)

鰐淵寺松本坊（上段）
墓石群 (2)

鰐淵寺是心院（中段）
墓石群 (1)

鰐淵寺是心院（中段）
墓石群 (2)

鰐淵寺等樹院（下段）
墓石群 (1)

鰐淵寺等樹院（下段）
墓石群 (2)

前圓流寺阿闍利竪者法印榮胤塔
（是心院墓石群）

僧正慥湛大和尚塔（松本坊墓石群）

前圓流寺阿闍利竪者法印寂海墓
（等樹院墓石群）

圓流寺開基豪教塔（等樹院墓石群）

松平定安寄進鳥居（紐解神社）

圓流寺と西尾団地との間にある墓石

松江市立女子高等学校内の東照宮石碑